

研究ノート

中国語正反疑問文と副詞の共起について

— 「c統御」の教学への応用—

A View on Co-occurrence of Chinese A-not-A Questions and Adverbials

— An Application of “c-command” for Chinese Teaching —

山口 直人

Naoto YAMAGUCHI

Key words : 正反疑問文, 副詞, 共起

0. はじめに

本稿は大学初習外国語としての中国語において、初期の段階で学ぶ「正反疑問文」と呼ばれるタイプの疑問文に対する教授法の試みである。この教授法は高等学校における中国語教育にも応用できると思われる。

中国語を初習外国語として教える場合、教育の早い段階においては、“吗”を用いた「諸否疑問文」(=「yes-no疑問文」)と「正反疑問文」(=「A-not-A疑問文」。「反復疑問文」とも呼ばれ、述語の肯定形と否定形を繰り返すことで作られる疑問文)は意味的にほとんど等しいものとして教えることが多い。しかし、両者が副詞と共起するときには、その許容性に大きな差がみられることは、よく知られた事実である。諸否疑問文と異なり、一般に正反疑問文は副詞の多くと共起できない。下の(1)~(3)はすべて非文である。

- (1) *他也来不来? <彼も来ますか?>とは解釈できず、非文。
- (2) *他一定来不来? <彼は必ず来ますか?>とは解釈できず、非文。
- (3) *这里的条件很好不好? <ここの条件はとても良いですか?>とは解釈できず、非文。

これらはすべて文末に“吗”を伴う諸否疑問文を用いなければならない。

- (1) 他也来吗? <彼も来ますか?>
- (2) 他一定来吗? <彼は必ず来ますか?>
- (3) 这里的条件很好吗? <ここの条件はとても良いです

か?>

この事実は多くのテキストや文法書で指摘されているが、その事実が述べられるだけで、「何故そうなのか?」については納得のいく説明がほとんどなされていない。加えて厄介なことは、(1)~(3)が非文であるという語感が初学者には得にくいことである。であればなおさら、初学者にはこれが非文となる理由を分かりやすく説明することが求められる。

正反疑問文と副詞の共起に関する「理論的研究」はこれまで数多くなされておき、異なる理論的枠組みでの考察が存在する(相原1983, 湯1984, 望月1987, 中川1994, 山口1996, 2008, 2012, 石井・伊藤2016)。しかし問題は、こうした理論的考察の成果が必ずしも初学者に対する教育的な効果に直結するとは限らないことである。つまり、たとえ「理論的」には正しくても、初学者には難しすぎるため、それをそのままテキストに採用するには「教学的」に相応しくないといったことがしばしば起こる。正反疑問文と副詞の共起の問題もまさにそうである。

本稿では上述した正反疑問文と副詞の共起について、特に生成文法的な文階層の観点から、初学者にも理解しやすく、かつ説得力のある教授法を提案したい。この方法に従えば、正反疑問文が副詞の多くと共起できない理由が、代表的な例を一つ挙げるだけで、初学者にも十分に理解してもらえと思われる。その考え方は一言で言えば、「正反疑問文中に副詞があると、聞き手にとって意味をなさない選択を迫ることになるために許容されない」ということである。

1. 「理論」と「教学」のジレンマ

正反疑問文と副詞の共起の場合と異なり、次のような文が非文であるという語感には、初学者にも比較的容易に得られると思われる。

- (4) *你是不是中国人吗?〈君は中国人ですか?〉とは解釈できず、非文。
 (5) *现在几点吗?〈今何時ですか?〉とは解釈できず、非文。

この理由について、我々は次のような原則をよく挙げる。

- (6) 中国語の疑問文には疑問を表す要素が一つあればよい。複数あると非文になる。

(4)と(5)が非文になる理由は、(6)の原則に反して、はじめに疑問要素“是不是”や“几”があるにもかかわらず、文末にさらに“吗”があることによる。よって、これらの文から“吗”を除けば正しい文になる。

- (4) 你是不是中国人?〈君は中国人ですか?〉
 (5) 现在几点?〈今何時ですか?〉

しかし、この問題は我々が考えるほど単純ではないようだ。

- (7) 张三以为李四买了什么?〈張三は李四が何を買ったかと思っていますか?〉
 =疑問要素“什么”が1つあることで疑問文である。

- (8) 张三想知道李四买了什么。〈張三は李四が何を買ったか知りたがっている〉
 =疑問要素“什么”が1つある点では(7)と同じだが、疑問文ではない。

- (9) 张三想知道李四买了什么吗?〈張三は李四が何を買ったか知りたがっていますか?〉
 =疑問要素“什么”と“吗”が同時に現れているが、非文ではなく、疑問文と解釈される。

(以上、(7)と(8)はHuang2009 p.262。(9)は山口の作例)

望月1980によって発見され、多くの注目を集めたこの現象は、Huang1982によって一応の理論的解決をみたとされている。しかし、(7)~(9)をも含めた疑問文の原則を述べるのは相当に複雑になるため、初学者相手に教える場合は、ひとまず(7)~(9)の事実を伏せて(6)の原則を教えるほうが良い。これは文法に限らず、すべての研究領域でみられる「理論」と「教学」のジレンマであろう。

本稿では、「一般に正反疑問文中に副詞があるとなぜ非文になるのか?」ということの説明するための方法として、初学者に比較的分かりやすい考え方を提示したい。

2. 『学習指導要領』における「文法」の取り扱い

本稿は高等学校での「外国語」科目の中の「中国語」に対する教育も視野に入れて考察する。現在、日本の学校教育において中国語が教えられているのは高等学校がほとんどであり、中学校において中国語が教えられている例はほとんどない。しかし「外国語」科目のうち、「英語」と異なり、高等学校における中国語は基本的に初習外国語であるために、文部科学省の定める『学習指導要領』については、中学校用の「中学校学習指導要領 第2章 第9節 外国語」を参考にしたほうが現実的である。その最後「その他の外国語」では、「その他の外国語については、英語の目標及び内容等に準じて行うものとする。」とあり、中国語の指導は英語に準じて行うことになる。

文部科学省の『中学校学習指導要領解説 外国語篇』(平成20年9月・平成27年3月付録追加)37頁には英語の疑問文の指導について、以下の記述がある：

「疑問文は、yes-no疑問文、orを含む選択疑問文、wh-疑問文などを指導する。

それぞれの基本的な特徴をその応答の仕方の違いなどからもとらえて理解させる必要がある。疑問文は、平叙文とは異なる語順になったり、動詞の形が変化したりすることが多いため、言語活動の中で何度も使用することで慣れさせることが重要である。」

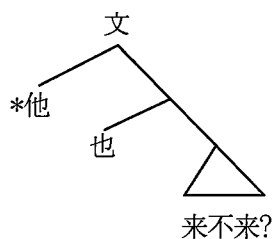
中国語の正反疑問文は後で見ると、いわば「orを含まない選択疑問文」とあると言える。高等学校での中国語教育において、諸否疑問文(=yes-no疑問文)と正反疑問文(=orを含まない選択疑問文)を学習する際に、諸否疑問文同様に正反疑問文でも文中に副詞を使ってしまう誤りが頻繁に発生することが容易に考えられる。そのため、正反疑問文に副詞を用いることが何故許されないのか?ということを知りやすい形で示すことが必要である。以下、生成文法の「c統御」の概念を応用した教授法の提案を行いたい。

3. 生成文法による文階層にもとづく分析

湯1984は生成文法の「c統御」の概念を使い「文階層において副詞が反復要素をc統御する場合には非文になる」という重要な指摘を行った。湯1984は様態副詞だけを扱い、“也、一定、很”といった副詞は扱っていないが、同様の説明が可能であると思われる。

以下、例文(1)を生成文法の「樹形図」と呼ばれる表示法で表す。

(10)=(1)



ここでc統御の概念を簡単に説明しておく。上の樹形図(10)において、“他”は“也”と“来不来”を共にc統御する。“也”は“来不来”だけをc統御する。“来不来”はどれもc統御しない。要するに、文においてより高い構造にある要素は、それよりも低い構造にある要素をc統御する。つまり、c統御は文中の各要素が他の要素に対して影響力を持ち得るか否かの判断となる概念である。

しかしながら、高等学校の中国語教育において、初学者を相手に樹形図やc統御の概念を直接出すのは好ましくないで、先ほどの湯1984の「文階層において副詞が反復要素をc統御する場合には非文となる」という指摘は、「反復要素の前にある副詞は、反復要素に対して影響力を持つ」と言い代えよう。数学の例えを用いれば、“也来不来?”は $x(a+b)$ と等価であるということになる。

であれば、 $x(a+b) = xa + xb$ と展開できるように、“也(来+不来)?” = “也来?+也不来?”と展開される。正反疑問文は選択疑問文と意味的に等価であるので、“也来?+也不来?”は“也来还是也不来?”と等価であることになる。

ということは、(10)=(1)*他也来不来?は以下の(11)と等価と考えられる。

(11) 他也来还是他也不来?

命題A 命題B

(この文の適格性については(14)まで保留する)

正反疑問文とはいわば肯定命題と否定命題からどちらか一方を選択させるタイプの疑問文である。ここで“也”は「類同」を表すので、命題Aと命題Bともにそれぞれ以下の前提を含むことになる([]内が前提)。

(12) 命題A：[誰かが来る] 彼もその人同様に来るのか?

(13) 命題B：[誰かが来ない] 彼もその人同様に来ないのか?

ということは、(11)他也来还是他也不来?(=(1)*他也来不来?)は以下の選択を聞き手に迫る疑問文ということになる。

(14) [誰かが来る] 彼もその人同様に来るのか?

それとも

[誰かが来ない] 彼もその人同様に来ないのか?

(14)では選択を表す「それとも」の上と下とでは[]で示した前提事項が異なっている。前提事項が異なると、続いて聞き手に選択を強いる文において「同様に」という言葉が表す意味も異なってしまうために論理矛盾が起こり、(14)を聞いた聞き手は返答の仕様が無くなってしまふ。つまり(14)が非文であるのは、意味解釈の際に聞き手の脳内での計算が破綻するからである。

ここで(14)と(11)は等しく、(11)と(1)は等しいと考えられる。ということは、例文(1)は例文(14)が解釈できないのと同じ理由によって非文と判断されると結論付けられる。

本来聞き手にとって意味のある選択は以下のようなものでなければならない。

(15) [誰かが来る] 彼もその人同様に来るのか?

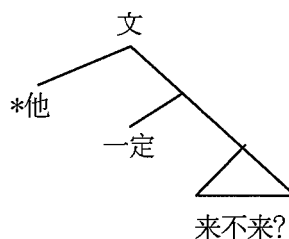
それとも

[誰かが来る] 彼もその人同様に来るというわけではないのか?

(15)であれば前提が等しい二つの命題からの二者選択となり、聞き手はどちらかを選択することができる。しかし、(1)*他也来不来?は(10)でみた文階層をしており、(15)のような解釈は成り立たないため非文になるのである。

この考え方は、“也”以外の他の副詞でも同様にあてはまる。例文(2)の樹形図を下に挙げる。

(16)=(2)



(16)は以下の選択を聞き手に迫ることになる。

(17)彼は必ず来るのか?

それとも

彼は必ず来ないのか?

(17)は“也”でみた(14)のように悪く感じないかもしれないが、聞き手にとって意味のある選択は、本来以下のようなものでなければならない。

(18)彼は必ず来るのか?

それとも

彼は必ず来るというわけではないのか?

つまり、聞き手に二者選択を迫る際、否定命題の否定要素は副詞をそのスコープに含んでいなければならない。しかし、(2)*他一定来不来?は(16)のような文階層をしているために、否定要素“不”は副詞“一定”をそのス

コープに含むことができないので(18)のような解釈は成り立たない。よって(2)は非文と解釈されるのである。

4. 教授法の提案

冒頭で述べたように，“吗”を使った諸否疑問文と正反疑問文を初学者に教える際に問題となるのは、副詞と共起した時に生じる両疑問文の適格性の差であった。つまり、次の(19)と(20)は意味的にほぼ同じであるにもかかわらず、副詞（たとえば“也”）が文中にあると、正反疑問文は成立しない。

(19) 他来吗?〈彼は来ますか?〉

(20) 他来不来?〈彼は来ますか?〉

(19) 他也来吗?〈彼も来ますか?〉

(20) *他也来不来?〈彼も来ますか?〉とは解釈できない。

初学者は非文の(20)をみてもこれが非文であるという語感を持ちにくいので、なぜこれがダメなのか分からない。よって、これが成立しない理由を説明してやる必要がある。その際、以下のような説明をしてはどうだろうか?

①副詞の代表として、一番分かりやすい“也”を例に取る。

②中国語は一般に前にある修飾成分はうしろの成分に影響力を持つので、“他来不来?”は $x(a+b)$ が $xa+xb$ と展開されるように“他来还是也不来?”と解釈される。

③するとこれは、

[誰かが来る] 彼もその人同様に来るのか?

それとも

[誰かが来ない] 彼もその人同様に来ないのか?

という聞き手にとって選択不可能な疑問文となるために成立しない。

5. おわりに

以上、正反疑問文と副詞の共起の問題について、特に生成文法的な文階層の観点から初歩的な説明を試みた。この考え方は先に述べたように、湯1984が生成文法の「c統御」の概念を使って行った「文階層において副詞が反復要素をc統御する場合には非文になる」という主張に沿って、それをより分かりやすく解説したものにすぎない。湯1984はさらに一歩進めて「逆に反復要素が副詞をc統御する場合には成立する」と主張している。次の(21)が成立することから、湯1984の考え方は強い一般性を持つものであることが予想される。

(21) 是不是他也来?〈彼も来るのか?〉

このように、生成文法の「c統御」の考え方は、正反疑問文と副詞の共起の問題に限らず、他の言語現象を説明する鍵となりうる可能性があるに違いない。

*本稿は山口2010に加筆・修正したものである。

主要参考文献

- 相原茂 1983 「“他也来不来?”はなぜ言えぬ?」『中国語』10月号 のち1991『中国語学習Q&A 101』147-149頁に再録, 大修館書店
- 石田知子 戸沼市子 1996『Why?にこたえる はじめての中国語の文法書』62頁, 同学社
- Huang, C.-T. James. 1982 Move *wh* in a language without *wh*-movement. *The Linguistic Review*1: 369-416
- Li, Y.-H. Audrey Li, Yafei 2009 *The Syntax of Chinese*, Cambridge University Press
- 石井友美・伊藤さとみ 2016「中国語の正反疑問文に見られる干渉効果について」『日本言語学会第152回大会予稿集』26-31頁, 慶應義塾大学 6月25, 26日
- 望月八十吉 1980「中国語の世界創造的述語」『中国語』6月号22-25頁, 大修館書店のち望月1994 166-174頁に再録
- 1987「中国語の疑問文その(3)」のち望月1994 229-254頁に「反復疑問文と“也”“都”“还”」と改題して再録
- 1994『現代中国語の諸問題』, 好文出版
- 中川裕三 1994「副詞と反復疑問文との共起について—認知言語学的観点から—」『中国語学』241号110-117頁, 日本中国語学会
- 湯廷池 1984「國語疑問文研究續論」のち1988『漢語詞法句法論集』313-399頁に再録, 台灣學生書局
- 山口直人 1996「反復疑問文と副詞の共起に関する一考察」『中国語学』243号94-103頁, 日本中国語学会
- 2008「中国語の反復疑問文と“也”の共起に関する新考察」『語学教育研究論叢』25号27-42頁, 大東文化大学語学教育研究所
- 2009「類同を表す“也”と否定のスコープ」『日中言語対照研究論叢』11号63-78頁, 白帝社
- 2010「反復疑問文と副詞の共起について—教学における理論言語学からの貢献—」『中国語教育学会第8回全国大会予稿集』144-148頁, 2010年6月5, 6日 桜美林大学町田キャンパス
- 2012「中国語文法研究の可能性—脳科学の応用—」『中国言語文化学研究』創刊号174-185頁, 大東文化大学大学院外国語学研究科 中国言語文化学専攻